

令和2年度第2回山形県環境教育推進協議会議事録

1 日 時

令和2年12月22日（火） 午後1時30分～3時10分

2 場 所

県庁10階 1001会議室

3 出席者等（敬称略）

(1) 出席委員

大戸 晃彦 澁江 学美 阿部 稔 後藤 正寛（Zoomによる参加）
玉谷 貴子 二藤部 真澄 今村 哲史

(2) 欠席委員

大場 里美 田中 裕子 田中 吉弘 阿部 英子

(3) 県・事務局

環境エネルギー部長	杉澤 栄一
環境エネルギー部次長	鏑水 功泰
環境科学研究センター所長	安部 悦子
環境エネルギー部環境企画課長	佐々木 紀子
循環型社会推進課長	三浦 光一郎
みどり自然課みどり県民活動推進主幹	菅原 隆志

4 会議の概要

(1) 開 会

(2) 挨拶（杉澤環境エネルギー部長）

(3) 議 事

① 次期山形県環境教育行動計画（第4次山形県環境計画）の素案について

今村会長	<p>みなさん、こんにちは。大変道の悪い中、御参加いただきありがとうございます。後藤委員にはWebで参加していただくということで、よろしくお願ひします。7月の第1回協議会で各委員からいただいた意見を基に、今般、新しい取組みも含めて行動計画案が出て来ておりますので、それについて、委員の方からも御意見をいただきたいと思ひます。</p> <p>それでは、暫時議長を務めさせていただきます。円滑な議事の進行に御協力をお願いします。</p> <p>最初に次期山形県環境教育行動計画案についてですが、今回大分リニューアルされています。これについて事務局から説明をお願いしたいと思ひます。まず資料1～4まで順に説明をいただいた後、皆様から御意見を頂戴したいと思ひますのでよろしくお願ひします。</p>
------	--

	<p>事務局より資料1～資料4について説明（説明の中で、環境科学研究センター所長、阿部委員より事例紹介）</p>
<p>今村会長</p>	<p>中身が色々ございました。質問及び御意見を各委員の方からお願いしたいと思 います。</p>
<p>大戸委員</p>	<p>まず、柱として人づくりの促進が一番上に掲げられたということは非常に意味 の大きいことで、私たち学校に勤務している教員にとっても身の引き締まる思い です。特に私は小学校に勤務しているので、入り口となる小学校6年間の学びの 中での位置付けも大きいだろうと身の引き締まるような思いがしています。ま た、全ての施策に関わってくる位置付けになっているところも非常に意義の大き いことですし、環境教育に対する本気度がうかがえ、非常に重要な位置付けに変 わってきたのではないかと思います。</p> <p>その中で、資料3にある目指すべき将来の姿として新たに起こされた2つ目の ○（次代をけん引する若者たちが環境に関心を持ち、保全等に向けた率先行動を 起こし、周囲の人々の行動にもポジティブな影響を与えている）は入れていただ いて非常に良かったと思いますが、目指す将来の姿では「若者たち」と使ってい ますが、4ページ目の課題の二つ目の○の2行目では「若者」になっています。 これらが指しているもの、示しているものの意味合いが違うのか若干気になった ので、「たち」が必要なのかこのままでいいのか検討いただけたらと思います。</p> <p>また、「次代をけん引する若者」と言った時に、リーダーを育てようとしてい るのかあるいは若者層全体を育てようとしているのか、意図がどちらなのかとい うことです。その後の「周囲の人々の行動にもポジティブな影響を与える」とす ると、みんながポジティブな影響を与えられる存在にはなり得ないのではないか という思いもあり、リーダー育成なのかみんながそういう方向に向かうようにす めるのかということが若干気になりました。読み手側の受け取り方で構わない ということもあると思いますので、言葉の整理などが必要なのかあるいはこのま までいいのかを御検討いただけたらと思います。</p> <p>最後に4ページ目の課題ですが、課題の文末の表現のことばの使い方が2種類 あり、意図的に違いを出しているのかが気になりました。「必要です」とまとめ ているところと「必要があります」と説明調でまとめているところがありますが、 意味があれば教えていただきたい。</p> <p>最後に、課題の中で、「学校、地域、職場等」となっているのですが、学校の中 では、「学校、家庭、地域」が一つの言葉のセットになっていて、家庭の取組 みというものを促さないとなかなか双方向で定着することができないと感じて います。後半の方には、学校・家庭・地域が出てくるので、課題の捉え方として、 「学校、家庭、地域」の連携協働が図られるように、是非、「家庭」を課題の中 に入れることを御検討いただきたい。事前配布していただき、読み込んできたと ころそういった感想を持ちました。</p>

今村会長	<p>御意見もありましたが、いくつか分からない点がありました。「若者」「若者たち」の使い分け、リーダーの育成なのかどうか、文末の表現の違いについて、課題の中に「家庭」という言葉を入れられるか、それについてお答えいただければと思います。</p>
事務局 (環境企画課長)	<p>最初にありました「若者たち」と「若者」の部分についてお答えしますと、目指す将来の姿では全体的な姿をイメージしていただくということで、多くの若者たちがというイメージを表すため使っており、文章中では簡潔に表現するという事で若者と表現しました。なお、御意見を踏まえましてどういった表現が適切なのか検討したいと思います。</p> <p>リーダーを育てたいのか若者全体を育てたいのかという点ですが、目指す将来像として、「全ての世代の県民一人ひとりが環境問題を「自分ごと」として捉え、自らの行動が環境に与える影響を理解し、環境に配慮した行動を実践している」と掲げておりますので、まず、全ての県民の皆さんが自分ごととしてという思いがあり、その中でリーダーとなっていく方の育成も必要と思いますので、リーダーとしても若者が育成されていければという、思いとしては2つあります。</p> <p>文末の表現として「必要です」、「必要があります」と違う表現になっているところについては、今後精査していきたいと思います。</p> <p>また、貴重な御意見をいただきました家庭の部分についても足りないところがあったかと思えます。これまで審議会等でも、親と子で双方向の伝え方があり、子どもだけでもだめで、親に対する環境教育の視点も重要という意見もありましたので、家庭の部分は何かの形でこの中に記載してまいりたいと思います。</p>
澁江委員	<p>資料の事前送付をいただきましてありがとうございました。また、先日のWebでのSDGsの研修にも私と職員2人で参加させていただき、研修の機会を得ることができ、また、それをもとに若い2人と話ことができました。県ではこうものを目指していて、私たちはいったい何ができるかという話ができる場になったことは本当にありがたいと思ったところです。</p> <p>私からは感想になってしまいますが、6ページ目の4つ目の・の中、「環境・経済・社会」という3つの視点、相互の関わりという文言を入れてもらったことが、私にとって非常にありがたいと思います。というのは、2月末からのいきなりの休校があつて、学校というものの存在、教員というものの存在を色々考える機会がありました。また、学校が始まってみると、子どもは関われば関わるほど感染ということを心配されたり、学校の中に外部の方を入れて学ぶ場を設定しようとすればするほど教育活動がうまく回らない。そこには矛盾が生まれるということだと思えます。同じように、環境というものを考えた時に、流通、経済活動を回そうとすればするほど、生産活動を回そうとすればするほど、そこには私達人間が、環境を保つというよりは環境を侵してしまう存在でもあり得るという矛盾の中で環境をどう考えていくかということになるのではないかと考えています。そのため、どう共生していくのか、どう共存していくのかということが、環</p>

境を守る・保つ主体となる人たちにとって大切な視点なのではないかと思っています。そういった意味で、ここにこうした言葉を入れていただいたことはありがたいと思っています。

もう一つ、人づくりというところでは、色々な取り組みをしています。県の各施策などを見ても、人と人との関わりの中で、身近な高校生や若者が伝え手になり、伝えていく立場に育て上げていく中で世代が伝わっていくということを考えた時に、若者から通訳になってもらうということが子どもたちにとっては大事なのではないかと思います。そうした意味ではこの活動に対しては大変期待が大きいと思います。

また、私が学校のお便りを書いてよく電話をいただくのが、英語が多くて分からないということです。この素案を見ると横文字がかなり多いと思います。これからパブコメなどもあるということです。下に注釈等をつけてもらっていますが、学校や行政という中では、どうしても用語が横文字やカタカナに傾いてしまう傾向があると思います。例えばエシカル消費、ナッジ、ESG投資なども分かりにくいところかと思しますので工夫をしてもらいたいと思います。

最後になりますが、農業という視点を入れていただいたことについてですが、私の中学校でも米作りをしています。いいものを作るためにはどうしても農薬を使わなければならないし、近くに川があって、水のありがたさを感じながら米作りをしているところです。そういうことを考えた時に、山形県の一番の基盤産業である農業とそれを支えていく人たち、支えていく環境、自然というものが一番身近なものであると考えるのならば、こうした視点はありがたいと思います。

最後に、是非、教育委員会を持っている教育財産を活用いただけるとありがたいと思います。例えば、少年自然の家でも色々なプログラムを行っています。阿部委員が以前その担当をしていますが、自然体験等との合わせ技のようにしていただくと、学校に対しての負担が少なくなると思います。新たなプログラムをつくるのではなく、あるものを活用していくという視点であれば様々な活動を上手に取り込んでいけるのではないかと思います。

前回まで、環境と教育というところが同じ方向を向いているようで、落ちて来なかったのですけれども、人づくりという視点でまとめていただいたことで、教育との連携というところがストーンと落ちたというふうに思います。

阿部委員

感想から申し上げますと、施策の柱の1番、目指す将来の姿に（次代をけん引する若者たちが環境に関心を持ち、保全等に向けた率先行動を起こし、周囲の人々の行動にもポジティブな影響を与えている）と追加されましたが、このことは高校の現場にとっては非常にありがたいと思います。先ほどのコラムや本校の取り組みのように、今の高校生は環境に対しての意識が非常に高いと思います。やはり、小中学校で環境教育を受けて高校生になっているので、その重要度を生徒たちは考えております。学習の中でも、特に探求型学習等では、身近な課題をどうしたら自分たちが解決できるだろうと考え地域に出たり、大学の先生と話をすることで研究が進んでいるのではないかと思います。そういった土台ができてい

	<p>ることで、今度は高校生が環境保全、持続可能な社会を創るための戦力として、自分たちは社会に貢献していかななくてはならないという意識のところまで引張っていかななくてはならないと思っております。</p> <p>そうした中で、「若者環境パートナー制度の創設」について、個人的にも関心があります。質問になりますが、年間400人の登録を目指しているようですが、どういふことをすればパートナーになれるかということ。例えば、SDGsや環境に関するワークショップに出た人なのか、それとも各学校で色々な活動をしている生徒なのか、対象はどのように考えているかです。その設定の仕方によっては年間400人が多いような気もしますし、広く環境に関わるということであれば少ないような気もします。どんなターゲットで設定しているのかをお聞かせいただきたい。</p>
<p>事務局 (佐々木 環境企画 課長)</p>	<p>「若者環境パートナー」は、これから新たに制度を作りたいと考えているところです。7ページ(2)担い手の発掘・育成・活用の二つ目の・になりますが、SDGsや環境に関する学習会を今年から実施しており、それを受講した生徒、学生さんをパートナーとして登録するというを現在は考えております。来年度は学習会を20回ほど開催したいと考えており、1回あたり20名程度で400名という数字になっておりますが、まだ制度を完全に固めておりませんので、例えば環境に関するボランティア活動への参加や学習の幅を広げること考えていきたいと思っておりますので、人数の設定なども変更される場合もあります。制度について今後さらに詰めていきたいと思っております。</p>
<p>阿部委員</p>	<p>ワークショップに参加する生徒であれば意識もかなり高いと思っておりますのでそれはそれで結構ですが、その他にも、先程のコラムにあったように、出前授業で小学校、中学校、少年自然の家等に行つて環境のボランティア活動をしている高校生もおりますので、ワークショップを受けるだけでなく、自分から広めて普及する活動も加えていただければ更に前向きな取組みになると思っております。カウントの仕方が問題になるかと思っておりますが、受け身だけでなく能動的に活動するというものも考えてもらえればと思っております。</p>
<p>後藤委員</p>	<p>今回の報告を見て感じたことは、人づくりということに非常に焦点が当たつているということ、自分ごととして事柄を捉えること、担い手を発掘していくということ、意識変革という言葉もありましたが、次世代の若い人をどのように育てていくのかという教育、人づくりのコンセプトが非常にはっきりと出ていると思つました。このことを考えるにあつて私が思うのは、自分ごととして自然や環境を大事にしている人とのふれあいや出会いを通じて、子どもたち、青年は何かを感じる、受け取つている、そういうものが大事なのではないかということ。つまり、受取り手と手渡し手からどのように作り出されるかということ併せて考えてみました。</p> <p>本校では北海道に修学旅行18泊19日という長めの就学旅行を行つています。</p>

内村鑑三の流れを汲む学校ですので、北海道大学の見学や一週間の酪農実習も行っていました。今年にはコロナで実施できませんでした。こういったことは初めてのことで、修学旅行の代わりにどうするかを検討し、地元の小国に目を向けて知ることになりました。

小国にはマタギといういわゆる狩猟を生業とした人たちが生活しており、小国の中でも山間部の金目地区には、1000本以上の栗を育成している栗園があります。生徒はそこに行って、マタギの方のお話を聞いたり、栗園を維持管理している方の話を聞く機会を得ました。豪雪地帯ですので、冬を乗り切るための食の確保やなぜ山の深いところに1000本以上の栗が育てられているのか、マタギの方々の自然の中での生業や生き方を直接聞く中で、非常に大きな学びをし、それがきっかけで自分の進路を考えたりする生徒も出てきております。人づくりの中で、人を通じて人と出会っていくことを大事にしていければいいと思ったのが一点です。

二点目は、今回、農業が文言として入ったということがうれしいことです。先程の説明にも含まれていましたが、水や土や気候は生業そのもので、農業は自分ごとなので、生徒は農業をしている人達の生き方やどれだけ環境が大事に守られてきたかということに触れて何かを感じ取ることが生まれたらいいと思いました。

SDGsについては、2030年を目指して国連で決まったことですが、2050年ゼロカーボンということもありましたが、本来の持続可能ということは、これまで長く続いてきたものの中から何か見出していき、再発見していくということもあるのではないかと思います。国連が言ったからといって一つのトレンドとしてではなく、先程の（山工）100年というスパンで考えているということもありましたが、長いスパンで地元山形を大事にしていくことを我々が今出来る中で考えていくということを示唆されてるような気がしました。

6ページの「環境問題を自分ごととして捉えるための意識改革」の7つ目の「企業における環境価値の意識を醸成する取組み」についてですが、意識変革の項目の中に入っているのが、環境に配慮した企業努力と読むのかもしれませんが、企業が入ることで、公害、排出する側、良くない環境を作り出す企業のことを教育の中で取り上げる場合に、どういう構造、歴史を経てきたのかということ考えてしまいます。福島原発は隣の県のことですから共有しなければならない内容であると思います。「企業で」ということは教育の中でどのように捉えていくかは大事なことでないかと思いました。

今日、アメリカの新聞とナイジェリアの新聞を読みました。SDGsという項目に絞って読んでいたのですが、アメリカの新聞はゼロカーボンについて同じスタンスでした。ゼロカーボンを要求されている中で、歩いたり自転車に乗ったり、公共交通機関を利用したりと似たように動いているのでトレンドだと思います。内乱のあるナイジェリアでも最近のニュースでSDGsは取り上げられています。そこでは何を一番目標にしているかということ、貧困なし、飢えなし、健康維持と、国の違いによってゼロカーボンどころの状況ではない国もあるということ

	<p>を知らながら、自分たちの国、地域がどう持続的に関わるかが課題だと思います。</p> <p>台湾の姉妹校のことも先程お聞きしましたが、当校でも韓国に姉妹校があり、有機農業を行っている農業高校と Zoom を使ったの交流事業として、色々なテーマで話をすることができました。コロナは良くない現象ですが、コロナがなければ実現できなかったことです。環境問題も地域にいても広く色々な国の若者たちと共有することができる可能性もあると最近感じています。とりとめのない感想になりましたが、以上です。</p> <p>玉谷委員 素案を拝見しうれしいと思ったのが、一番最初に環境問題こそ自分ごととして捉えてもらうということです。生かされているのはこの環境の中にあつてこそだと思つるので、実際に生活している中で、自分の命が農業や林業、水産資源によって支えられているということに気づくというのがまず第一歩だと感じました。</p> <p>今回、若者環境パートナーを創設してくこと、100 年後に向けて山形県でマンゴーを作ろうという工業高校の生徒さんの発表を拝見し、未来をしっかりと見据えるような若者をつくってあげて、それを現実に持っていけるようにサポートが出来る大人たちが周りにいて欲しいと感じました。ですので、若者を対象と書いてありますが、是非その周りでサポートする方も一緒に育て、全体を巻き込むような形にしたらいいのではないかと思います。</p> <p>山形工業高校の生徒さんの発表については、是非、YouTube に載せて、県民の方に見てもらったらとてもおもしろいと感じました。雪国マンゴー、山形マンゴーを作っていくことを応援していきたいと思つています。</p> <p>また、澁江先生や皆さんから発言がありましたが、文言に関して、エシカル消費とかナッジということばについては、高校生であれば分かり理解しようとするだろうけれども、しっかりと理解するまでに時間がかかるかもしれません。そして、その上の年代になると、何だろうと理解できなくなるとそこで止まってしまう可能性があるのでは、方向性にも書いてありましたとおつり、山形らしい環境というものを考えていくうえでは、山形らしい消費の文言を考えていただければいいのではないかと感じました。</p> <p>最後にここで提案なのですが、小学校、中学校、高校でしっかりと環境を考えていこうと思つた時に、山形県は林業も盛んな土地ですので、もし、これから新しい学校ができるのなら、山形県の山からとれた木で作つた机を使うことができれば、毎日接するところで山形の木を感じながら勉強できるのではないかと感じましたところでは。</p>
<p>二藤部委員</p>	<p>私も拝見した時に、今の計画も「やまがた愛の人」を育てるということで、郷土愛の心を育てるということですが、今回の計画はそれ以上に、人づくり、自分ごととして捉えるということが一番上にきているところが、今後 10 年、20 年、100 年先を考えた場合に非常にいい計画になっていると感じます。</p> <p>先ほど山形工業高校さんの発表もありましたが、私たちの企画でも高校生に事例発表をしていただいたり、山形工業高校さんの取組みも 10 月末に発表いた</p>

<p>今村会長</p>	<p>きましたが、同じ場面に学校を卒業して間もない世代の社会人の方に参加いただいたり、同じ壇上に立ってもらうことで、双方向で情報を知ることができ、刺激になっているようです。話を聞いていて将来が楽しみになっている部分が非常にあって、私個人としても刺激を受けました。ですので、若者環境パートナーもそうですが、高校生、中学生、小学生の世代が双方向の取組みを知れるような機会も大事になるのではないかと考えます。</p> <p>また計画の8ページに、「環境情報総合ポータルサイトの整備」とありましたが、環境という分野がとても幅広く、環境教育、温暖化、森林等幅広いので、総合的なサイトを整備していただけると私達NPO等が情報を発信するにあたって参考にさせていただいたり、相談を受けた時に情報提供しやすくなる気がします。この中では、前年の会議でもあったと思いますが、環境教育の育成部分について、温暖化防止活動推進員、環境アドバイザー、森林インストラクター等、講師になる方も幅広くそれぞれで活動しているので、ポータルサイトで総合的に情報発信していただくとテーマに応じた講師の相談がしやすくなるのではと期待しています。</p> <p>最後に、温暖化防止センターという観点から、適応策というところも全ての県民の方に知ってもらわなければならないことで、熱中症や7月豪雨等、実際に影響が出て来ている部分がありますので、人づくり、自分ごととして捉えるという意味合いでは非常に大事なテーマになってくると感じたところです。</p> <p>皆様方のお話を伺いまして、前回は6番目に位置していた人づくり、教育面が、今回、一番上に掲げられたところ、そして、それ以外のチャレンジ2から6までは基本的には対等だと思っておりますが、総括的という位置付けで全面に出ているというところに今回の計画の特徴があると思います。第4次計画の場合は、CO2と人材育成というのが一つのキーワードなのではないかと思っております。そういう点で、環境教育推進協議会としては意を汲んでいただいたということでありがたく思います。</p> <p>それぞれの柱ですが、先程文章の中にもありましたが、「環境と経済と社会」とありますが、環境というと普通は自然環境と社会環境に区分されますが、そうすると経済・社会は社会環境、自然環境は自然科学、自然そのものになると思います。これがそれぞれ大きな領域を占めていて、その交点の部分、交わった部分の中に我々人がいて、それぞれがお互いうまく連携できるようなやり取りになっているという意味合いで捉えているのではないかと考えています。この書きぶりについてはその点がもう少し出るとおもしろいと思いました。</p> <p>一つだけ気になった部分が、例えば4ページの課題の○の二つ目、「次代をけん引する若者の育成や活用」というところについて、育成・活用というのがその他にも「担い手の発掘・育成・活用」となっていますが、活用というのは日本語として適切かどうかという点です。発掘していきます、育てます、使ってあげますというのはことばとしてどうなのか、使い方を考えてもいいのではないかと考えます。</p>
-------------	--

あとは、エシカル等の文言については、SDG sと同じように説明をつけていただくといいかと思えます。

それから、かなり難しいことかもしれませんが、目指す将来の姿の中の自分ごとというのは大前提で、主体的に活動するのは大事なことです、「理解して」「行動する」そして「意識を高める」「郷土愛が育まれる」ということになるのですが、学ぶこと以前に価値や感性、思考と賢明な判断のような力を習得することが必要で、「学んで」「行動する」間のところに自分自身の価値判断があるので、考えて判断する能力を一番育てたい。学力というのは一番根幹にそこがあると思えます。そういう人材を育てることがよい行動にもつながると思うので、思考や判断するということを入れられるのであれば入れていただきたい。それが入ると学校や教育現場では、環境教育をすれば思考力や創造力、判断力等の能力が育ち、色々な教科でも環境と関わってやれば伸びるというように捉えてもらえるのではないかと教育の立場から思えます。

今までは、どうしてもものの理解ばかりを言っていたような気がしますが、それを人ということで見えていただけたことと、先を見通していただいたこと、時間的な軸で考えていただいたことは大変評価したいと思います。

副題の「ゼロカーボンへのチャレンジ」に関しては、もしかすると10年後には変わっているかもしれませんが、第4次計画に関してはこれで頑張るという点でよろしいと思えます。是非この人づくりの第4次計画がうまく機能して、各学校やNPO団体、市民の方に降りていくことを願ってやみません。

最近、学校ではGIGAスクール構想で一人一台iPadが配布されるようですが、iPadを持つというのは一人一人の学習を進めるだけで、コンピューターに強くなれということではないです。それは2番目の話で、一人一人が考える力を作っていく、そのためにも人づくりというのをうまく使っていただければと思えます。

それから、担い手の裾野を広げるということについて、若者等幅広い年齢層となっていますが、できれば幼小中高、成人ともう一步踏み込んでもいいのではないかと感じはします。それぞれの世代ごとの学び方、育成の仕方があると思えますので、行動計画が進めば、その辺りを具体的に掘り下げてやっていただければいいと思えます。期待も込めてというコメントにさせていただきたいと思えます。

本日、質問もありましたが、意見、感想をいただきましたので、事務局では、それを今後の計画策定に生かしていただければと思えます。

以上で議事を終了したいと思います。

—議事終了—

(5) その他

(6) 閉会